

# 女子棒高跳びをメジャーにするには ～競技者的観点から～

的場 遥 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)  
指導教員 海老島 均

キーワード：女子棒高跳び メジャー化 競技環境

## 1. 緒言

スポーツをメジャースポーツとマイナースポーツに分けた場合に、現状では女子棒高跳びは、マイナースポーツに区別されるのではなからうか。多くの種目の中で、なぜ、女子棒高跳びは競技人口が少なく、世間に知られてないのか。本研究では棒高跳をメジャースポーツにするのは、どのような問題点があり、改善策が必要なのかを検証していく。

## 1. 研究方法

本研究は文献調査及び、インタビュー調査で行った。インタビュー調査対象は、日本トップ選手、西日本選手権出場選手、関西選手権出場選手などの現役女子棒高跳び選手 10 人に 2010 年 9 月～、10 月の間にインタビューし、現状からの問題点の抽出、文献研究を基に具体的な解決策の提示を考察する。

## 2. 結果と考察

現状から考えられる問題点を以下の 3 つに観点にまとめた。

### 1)環境要因

棒高跳びの大衆化がされない理由として、棒高跳びに必要な用具が、他の種目に比べて高価である。設備や用具にかかる経費など、経済的な問題が関係している。また、棒高跳びの試合数が少なく、各都道府県の陸上競技協会等が開催する記録会では、運営側に申請しなければならない。

### 2)人的要因

棒高跳びのような技術種目は、指導することが難しく、指導者の中には、この種目を教えるこ

とにためらいを感じものもいる。指導者の方でも、まだ十分に技術の指導方法が確立していないと感じており、練習にある程度の危険が伴う。このような理由などが原因で限られた指導者しか行われていない。また、練習ができる環境であっても、人数が必要になり、棒高跳びをしたくても、できない選手が他の種目を選ぶ場合が多い。

### 3)複合的要因

棒高跳びは、陸上競技の中でも危険な競技であり、女子に関しては親が競技をさせない場合もある。またインターハイ種目に導入されていないのも大きな原因の一つである。全国レベルの試合は日本ジュニア・ユース陸上競技選手権大会、国民体育大会しかなく、女子棒高跳びを専門とすると、高校生にとって 1 番大きな試合に自分の専門種目で出ることができない。

## 4. まとめと今後の課題

結果と考察を基に、競技環境の設備の改善、指導者の育成、インターハイ種目への導入が必要だと考える。また、日本の陸上界はジュニアでは世界と互角に戦えるが、シニアでは通用しないのが現状である。世界で戦えるようになるには、世界と日本の育成の違いを比較し、定義する必要があると考えられる。

## 5. 主要参考文献

広田哲夫 (1989) : 「棒高跳～最新陸上競技入門シリーズ⑥」 ベースボール・マガジン社

金原勇 (1964) : 「陸上競技 (フィールド編)」 学芸出版社

丸山吉五郎・古藤高良・佐々木秀幸 (1971) : 「陸上競技教室」 大修館書店